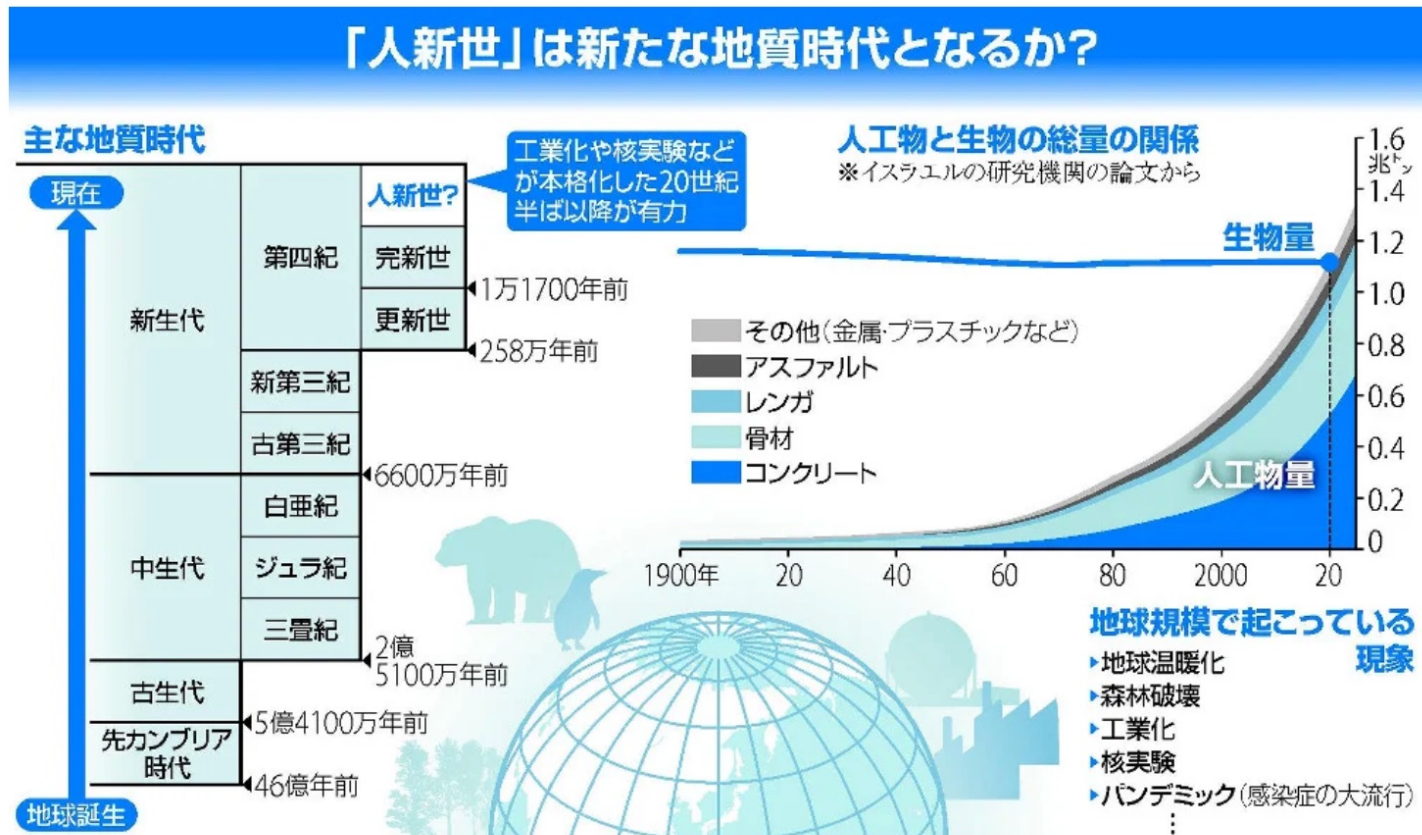




斎藤幸平
『人新世の「資本論」』
ブックレビュー

人新世（ひと・じんしんせい）とは

- 人類の経済活動が地球に与えた影響があまりに大きいため、ノーベル化学賞受賞者のパウル・クルツツェンは、地質学的に見て、地球は新たな年代に突入したと言い、それを「人新世」(Anthropocene) と名付けた。人間たちの活動の痕跡が、地球の表面を覆いつくした年代という意味である。

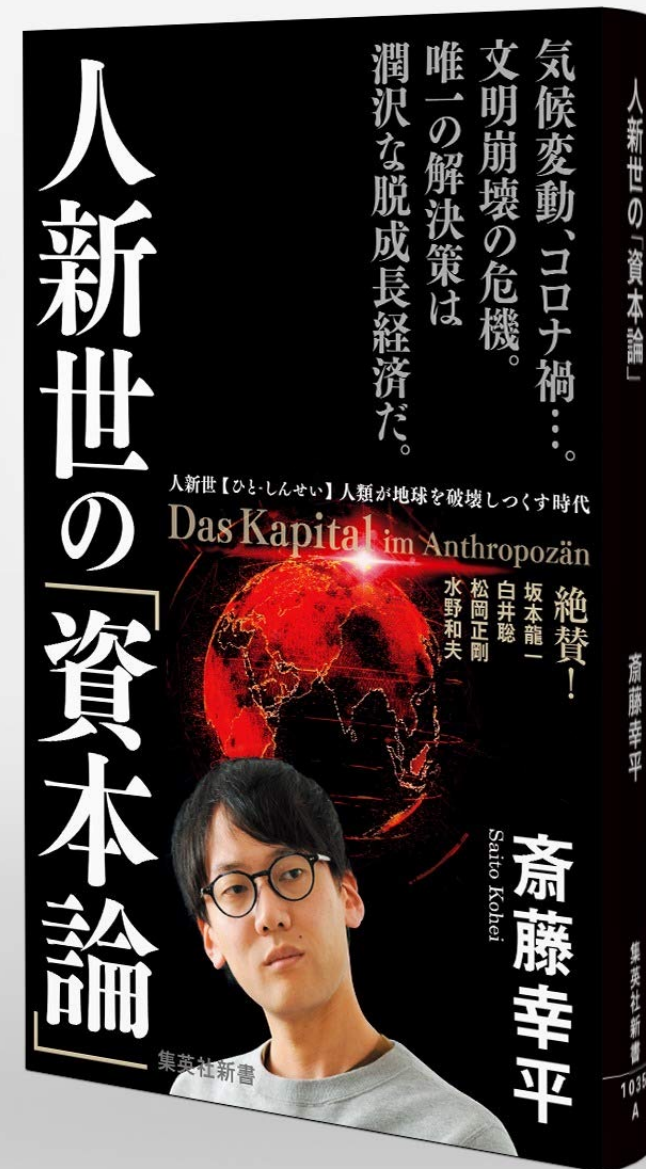


出典：読売新聞オンライン

なぜ、今、資本論なのか

- 著者の言ってる「マルクス」・「資本論」は、旧来のイメージとはかなり違います。
 - 実はマルクスは『資本論』の第一巻は刊行したものの、全三巻の完成を見ぬままにこの世を去っており、第二巻以降は盟友のフリードリヒ・エンゲルスが後を継いで刊行しました。マルクスが晩年に遺した膨大な草稿や研究ノートには、エンゲルスの編集した『資本論』には収められなかった重要な論点が含まれています。けれども、それらは刊行されずに長らく眠っていたのです。
 - マルクスが遺した手紙や晩年の研究ノートといった新資料を重ね合わせることで、彼のエコロジー研究や共同体研究といった、**これまでとは違う視点からの『資本論』の読解**が可能になります。

- 著者略歴（「BOOK著者紹介情報」より）
 - 斎藤幸平
 - 1987年生まれ。大阪市立大学大学院経済学研究科准教授。ベルリン・フンボルト大学哲学科博士課程修了。博士(哲学)。専門は経済思想、社会思想。Karl Marx's Ecosocialism:Capital,Nature,and the Unfinished Critique of Political Economy(邦訳『大洪水の前に』)によって、権威ある「ドイッチャー記念賞」を歴代最年少で受賞(本データはこの書籍が刊行された当時に掲載されていたものです)
- 出版社：集英社(2020/9/17)
- 発売日：2020/9/17
- 新書：384ページ
- 販売価格：1,122円
- 出版から半年余りで25万部を突破



目次

- はじめに——SDGsは「大衆のアヘン」である！
- 第一章 気候変動と帝国的生活様式
- 第二章 気候ケインズ主義の限界
- 第三章 資本主義システムでの脱成長を撃つ
- 第四章 「人新世」のマルクス
- 第五章 加速主義という現実逃避
- 第六章 欠乏の資本主義、潤沢なコミュニズム
- 第七章 脱成長コミュニズムが世界を救う
- 第八章 気候正義という「梃子」
- おわりに——歴史を終わらせないために

はじめに——SDGsは「大衆のアヘン」である！

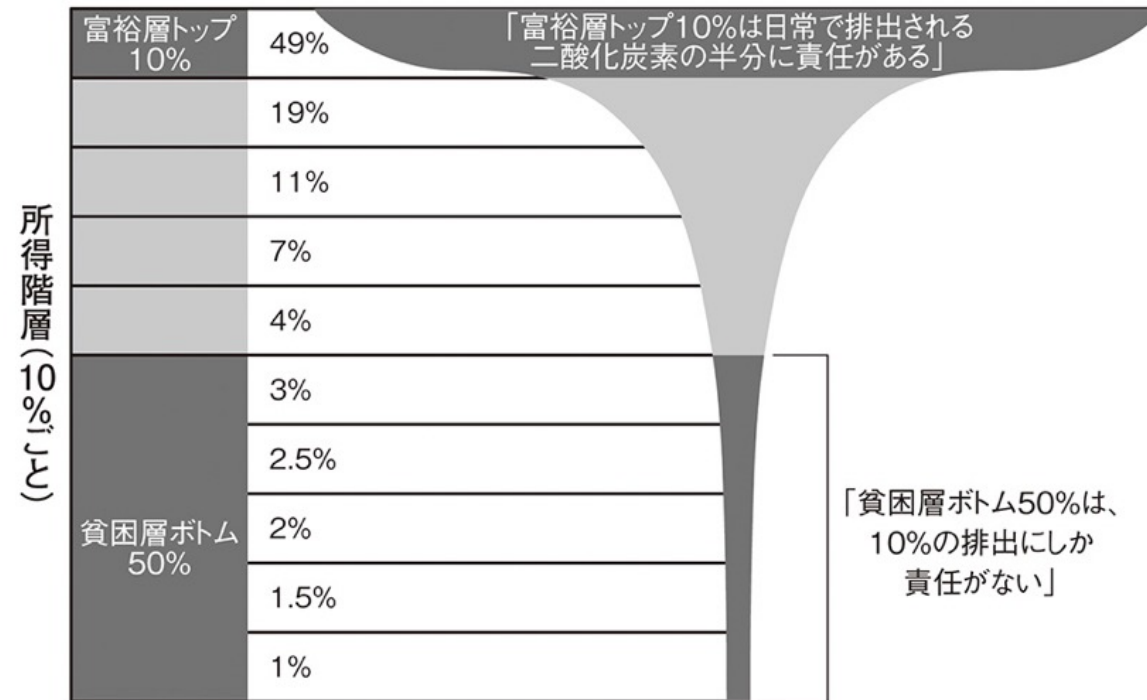
- 温暖化対策として、あなたは、なにかしているだろうか。
 - レジ袋削減のために、エコバッグを買った？
 - ペットボトル入り飲料を買わないようにマイボトルを持ち歩いている？
 - 車をハイブリッドカーにした？
- はっきり言おう。
 - その善意だけなら無意味に終わる。
 - それどころか、その善意は有害でさえある。
- かつて、マルクスは、資本主義の辛い現実が引き起こす苦悩を和らげる「宗教」を「大衆のアヘン」だと批判した。
- SDGsはまさに現代版「大衆のアヘン」である。
- **温暖化対策をしていると思いついで、真に必要とされているもっと大胆なアクションを起こさなくなってしまうからだ。**

帝国的生活様式

- 不可視を行うことで問題を未来につけ回している。
 - 環境的負荷のグローバル・サウスへの転嫁
 - 労働力の搾取。
 - 地球環境の搾取。
 - 資源
 - エネルギー
 - 食料
 - これらの痛い話を見えなくすることで先進国の豊かさを維持してきた。
- 「経済成長の罠」と「生産性の罠」
 - 経済成長→労働生産性の向上→失業者の増大→経済規模拡大で吸収→資源消費量が拡大

富裕層の生活様式

図9 所得階層別・二酸化炭素排出量の割合



Oxfam, "Extreme Carbon Inequality" 2015 をもとに作成

世界の富裕層トップ10%が二酸化炭素の半分以上を排出している。
先進国で暮らす私たちはそのほとんどがトップ20%に入っている。

気候ケインズ主義の限界

- グリーン・ニューディール
 - デカップリング
 - 大気中から二酸化炭素を除去する新技術？
-
- 以上の施策も問題解決には至らない。

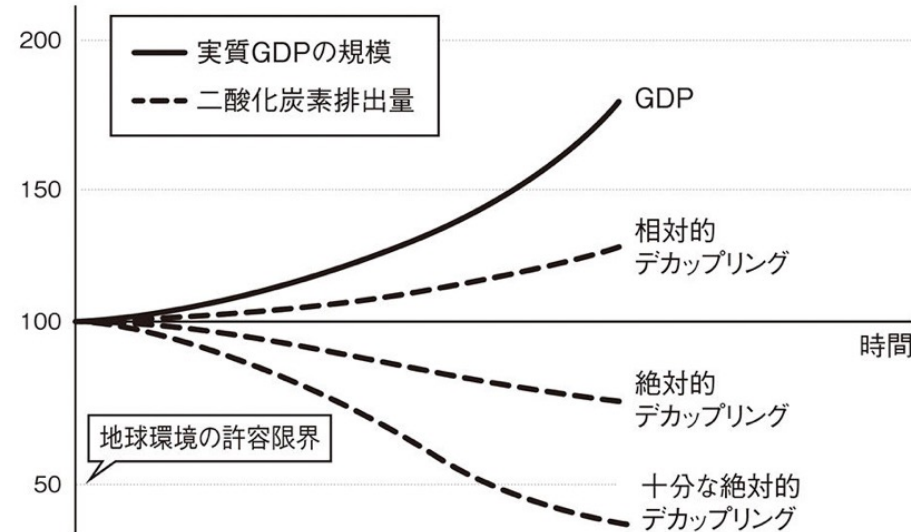
グリーン・ニューディール

- 再生可能エネルギーや電気自動車を普及させるための大型財政出動や公共投資を行う。
- そうやって安定した高賃金の雇用を作り出し、有効需要を増やし、景気を刺激することを目指す。
- 好景気が、さらなる投資を生み、持続可能な緑の経済への移行を加速させると期待する政策。
- かつて20世紀の大恐慌から資本主義を救ったニューディール政策の再来を、という願いがここには読み取れる。
- 新たな緑のケインズ主義。
 - 「緑の経済成長」
 - 気候変動を好機にして、これまで以上の経済成長を続けることができるかもしれないという「希望」。
 - その「最後の砦」の旗印になっているのが、「SDGs」だ。
 - それが果たして、地球の限界と相容れるのかどうか、という疑問が湧いてくる。

デカップリング

- デカップリングとは
 - 日本語で「切り離し」・「分離」を意味する。
 - 経済や環境の分野では広く使われる概念である。
 - 通常、「経済成長」によって「環境負荷」は増大する。
 - つまり、ここでは経済が成長しても、環境負荷が大きくならない方法を探ること。

図6 実質GDPと二酸化炭素排出量のデカップリング



ケイト・ラワース『ドーナツ経済学が世界を救う』（黒輪篤嗣訳、河出書房新社、2018年）をもとに作成

大気中から二酸化炭素を除去する新技術？

- IPCC（気候変動に関する政府間パネル）の「知のお遊び」
 - BECCS：バイオマス・エネルギーの導入によって排出量ゼロを実現しつつ、大気中の二酸化炭素を回収して地中や海洋に貯蓄する技術を用いて、二酸化炭素排出量をマイナスに持っていこうとするもの。
 - 2°C目標達成のためには：インドの国土の2倍の農地面積→熱帯雨林の伐採
 - 農業生産のために大量の水を消費。
 - 二酸化炭素を海底に注入→海洋酸性化の大幅な進行。
- ↓
- 大規模な「転嫁」が起こる。

気候変動は止められないのか。

結論から言えば止められる。

しかし、経済成長をしながら、
二酸化炭素を十分な速さで削減するの
は、ほぼ不可能である。

温暖化を止めるには、脱成長の実現が不可欠。

脱成長を達成することは可能なのか。

資本主義の元での脱成長という選択肢

- 成長は資本主義の根本である。
- それを否定することは、資本主義自体を否定している。
- それは「丸い三角形」描くようなものである。

幸せになるためには

「経済成長が必要だ」

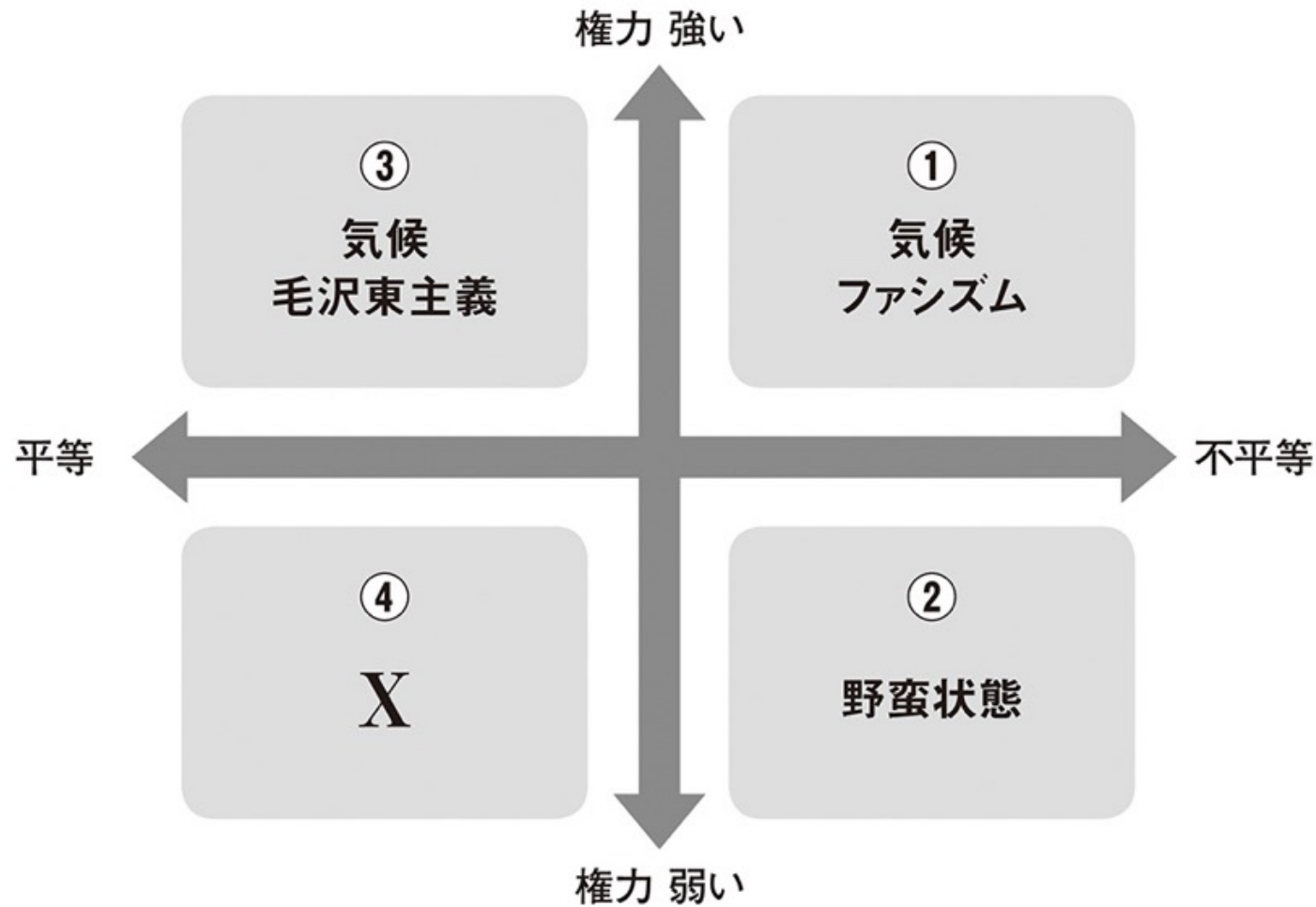
とっていないだろうか。

経済成長と幸福度に相関関係は存在するのか

- 経済成長と幸福度に相関関係は存在するのか
 - あるレベルを超えると、経済成長と人々の生活の向上に明確な相関関係が見られなくなる。
 - いくら経済成長しても、その成果を一部の人々が独占し、再配分を行わないなら、大勢の人々は不幸になっていく。
 - 逆にいえば、経済成長しなくても、既存のリソースをうまく配分さえできれば、社会は今以上に繁栄できる可能性がある。

公平な資源配分をするための仕組み

図14 四つの未来の選択肢



「X」という選択肢

人類が自由・平等・民主主義を守りながら、
生き延びるラストチャンスは
この選択肢のうちにしかない。

〈コモン〉という第3の道

- 〈コモン〉とは、社会的に人々に共有され、管理されるべき富のこと。
- 地球を〈コモン〉として管理する。
 - 資本主義は例えば水力という〈コモン〉から独占的な化石資本へ
- アメリカ型自由主義とソ連型国有化の両方に対峙する。新たな道。
 - 市場原理主義のように、あらゆるものを商品化するのでもなく、
 - ソ連社会主義のように、あらゆるものの国有化を目指すのでもない。
- 第3の道としての〈コモン〉は、水や電力、住居、医療、教育と言ったものを公共財として、自分たちで民主主義的に管理することを目指す。
- マルクスにとって、「コミュニズム」も〈コモン〉
 - 「コミュニズム」とは、ソ連のような一党独裁と国営化の体制を指すものではなかった。
 - 彼にとっての「コミュニズム」とは、生産者たちが生産手段を〈コモン〉として、共同で管理・運営する社会のことだったのだ。

「脱成長 Kommunismus」という到達点

- この構想は、ノスタルジックに「農村へ帰れ」とか、「Kommunionを作れ」というような話ではけっしてない。

図17 マルクスが目指していたもの

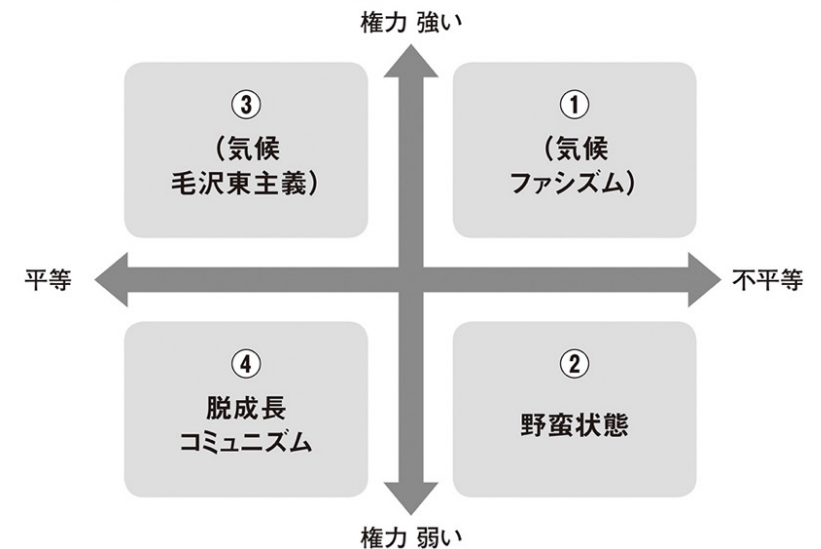
		経済成長	持続可能性
1840年代 ↳ 1850年代	生産力至上主義 『共産党宣言』、『インド評論』	○	×
1860年代	エコ社会主義 『資本論』第一巻	○	○
1870年代 ↳ 1880年代	脱成長 Kommunismus 『ゴータ綱領批判』、『ザスーリチ宛の手紙』	×	○

- 資本主義は絶えず欠乏を生み出すシステムなのである。
 - 資本主義によって、〈コモン〉は意図的に希少価値を高められたり、希少価値の高いものだけを利用することによって、意図的に価値を高められてきた。
 - ブランド化と広告が生む相対的希少性
 - 例えば、大都市の土地
 - それによって使用価値（有用性）は変わらないが、価値は増大する。

コロナ禍も資本主義の産物

- 気候変動もコロナ禍（パンデミック）も専門家は警鐘を鳴らしていた。
- 発生原因：森林破壊・地球規模での開発
- 優先順位：人命か、経済か
- 対策：気候毛沢東主義と同様な対応
 - 国家権力の発動
 - ロックダウン
 - 個人のプライバシーを犠牲に

図18 四つの未来の選択肢



資本主義の元では脱成長は実現できない。

脱成長コミュニズムが世界を救う

- トマ・ピケティが社会主義に「転向」
『21世紀の資本』（2014） →
『資本とイデオロギー』（2019）
- 「飼い馴らされた資本主義」ではなく、「参加型社会主義」
- 労働者による企業の「社会的所有」
- 株主ではなく、労働者たちが自分たちで生産を「自治管理」（autogestion） ・ 「共同管理」（cogestion）する。

**消費の管理→生産の管理。
自然の循環に合わせた生産抑制。**

デトロイトに蒔かれた小さな種

- 2013年に2兆円近い負債を抱えてデトロイト市は破綻した。



- 破綻によって過疎化した都市で有機農業が始まった。



- 市全体が都市果樹園
 - もし、デトロイトの食料がすべて地産地消になったら。

小さな種を育てるために、社会運動からの強力な支援が不可欠

- 「生活様式」の超克→「生産様式」の超克
↓
- そのために、政治は資本に挑まなければならない。
↓
- それゆえ、市民による社会運動が必要になる。

脱成長コミュニズムの柱

- 脱成長コミュニズムの柱①——使用価値経済への転換
 - 「使用価値」に重きを置いた経済に転換して、大量生産・大量消費から脱却する。
- 脱成長コミュニズムの柱②——労働時間の短縮
 - 労働時間を削減して、生活の質を向上させる。労働の魅力向上。
- 脱成長コミュニズムの柱③——画一的な分業の廃止
 - 画一的な労働をもたらす分業を廃止して、労働の創造性を回復させる。
- 脱成長コミュニズムの柱④——生産過程の民主化
 - 生産のプロセスの民主化を進めて、経済を減速（意思決定の減速）させる。
- 脱成長コミュニズムの柱⑤——エッセンシャル・ワークの重視
 - 使用価値経済に転換し、労働集約型のエッセンシャル・ワークの重視を。

ブルシット・ジョブVSエッセンシャル・ワーク

- ブルシット・ジョブ：クソくだらない仕事。
- 現在高給をとっている職業として、マーケティングや広告、コンサルティング、そして金融業や保険業などがあるが、こうした仕事は重要そうに見えるものの、実は社会の再生産そのものには、ほとんど役に立っていない。
- 「使用価値」をほとんど生み出さないような労働が高給のため、そちらに人が集まってしまっている現状だ。
- 一方、社会の再生産にとって必須な「エッセンシャル・ワーク（「使用価値」が高いものを生み出す労働）」が低賃金で、恒常的な人手不足になっている。
 - 例えばケア労働。

自然回帰ではなく、新しい合理性を！

**都市の生活や技術を捨てて、
農耕共同体社会に
戻ろうというものではない。**

バルセロナの気候非常事態宣言（2020年1月）

- 恐れ知らずの宣言内容。
- 市民の力の結集。

- 2050年までの脱炭素化。
 - 数十ページに及ぶ分析と包括的でかつ具体的な240以上の行動計画。

- 「フィアレス・シティ」を世界最初に旗揚げ
 - 国家が押しつける新自由主義的な政策に反旗を翻す革新的な地方自治体を指す。

最も画期的な部分は気候正義 (climate justice)

- 気候変動を引き起こしたのは先進国の富裕層だが、その被害を受けるのは化石燃料をあまり使ってこなかったグローバル・サウスの人々と将来世代である。この不正を解消し、気候変動を止めるべきだという認識が、気候正義である。
- 欧米では毎日のようにメディアを賑わせている。
- 国境を越える自治体主義。
 - 「フィアレス・シティ」のネットワークは、アフリカ、アメリカ、南米、アジアにまで広がり、77もの拠点が参加している。

持続可能で公平な社会への跳躍

- グローバル・サウスに学ぶ姿勢。
- 今、「常識」とみなされているものを転覆していく。
 - 「資本主義の超克」、「民主主義の刷新」、「社会の脱炭素化」
- 経済成長という生産至上主義を捨て、「使用価値」を重視する社会のビジョンが生まれてくるのである。
- 「3.5%」
 - ハーバード大学の政治学者エリカ・チェノウェスらの研究によると、「3.5%」の人々が非暴力的な方法で、本気で立ち上がると、社会が大きく変わるというのである。
- 本書を読んだあなたが、3.5%のひとりとして加わる決断をするかどうかにかかっている。

問い

SDGsは「どんな地球に住みたいのか・
そのために私は何をするのか」という
私たちに向けられた
大きな問いだと思います。

今回紹介させていただいた
「人新世の「資本論」」も視点は違えど
持続可能な地球にする方法を
問いかけているとも考えられます。

その新たな考えに触れた今、
改めて気づきや感想を共有してみましよう。